

宅地化が進む豊中にも、代々受け継がれてきた農地を守り続ける人がいます。新鮮で安全、おいしい野菜を提供するかわらわら、小学生の農業体験や幼稚園の芋ほりなど、地域の子どもたちと土に触れる機会を提供しています。

豊中で農業を守る

「農のある風景を残そう」

桜井谷あおぞら朝市運営委員会（桜井谷）



ひとり或少しずつでも、みんなで持ち寄れば多種多様な野菜がそろいます

開催場所：JA 大阪北部 桜井谷支店駐車場（桜の町4-1-9）

開催日時：第1・3土曜日 午前9時から（7月・8月は毎週午前8時30分から）

10年ほど前、当時、豊中市農業委員会会長だった阪口博さんは、周囲で耕作をしていない農地が増えていることに危機感を覚えます。そこで、農地の有効活用を所有者に呼びかけるとともに、そのとき野菜を出せる人だけが出す仕組みの「桜井谷あおぞら朝市」を立ち上げました。親の代までは、米や野菜をつくって出荷していた家も多い桜井谷地区。会社勤めをリタイアした人たちが「いまだけ、こだけ、少しだけ」なら自分にもできると呼びかけに応じました。

「約25人の生産者が、無理せず続けられるようにしています。朝市は生産者同士の交流の場でもあり、お客さんの反応を見て、もっといろいろな野菜をつくってみようという意欲にもつながっています」と話すのは運営委員会代表の花岡一さん。いまでは大勢の人が買い物に訪れる朝市は、人と人の交流、生きがいづくり、まちづくりの場にもなっています。

▼豊中産野菜を買い取る場所▲

地域こだわりマルシェ＆野菜市場

毎月第1土曜日10時～

e MIRAI E 環境交流センター（中核校）

くらしかん地産地消イベント

毎月第2水曜日10時～

豊中市立生活情報センターくらしかん（北核校）

地産地消採りたて野菜市

毎月第4木曜日10時～ さわ病院敷地内（城山町）

豊中で農業を守る

「地元産の

おいしい野菜を届けたい」

光久修平さん（小曾根）



各地で開かれる農業講習に参加して栽培知識を吸収します



現在27歳の光久修平さんは、5年前から本格的に農業に取り組み始めました。小さい頃から祖父が丹精込めてつくった野菜が毎日の食卓に並んでいました。祖父が亡くなってからはじめて、その有り難さを実感し、自分がそれを引き継ぎたいと思った」と話します。いまでは、早朝に収穫した野菜を、毎日近くのスーパーに出荷して、評判も上々。

「地域の直売会では、お客さんの反応が直接伝わって勉強になります。これからは近郊野菜というメリットを活かして鮮度重視のおいしい野菜をより多くの人に届けたい」と抱負を話してくれました。

豊中で農業を守る

「安心できる野菜づくりをしたい」

光久隆晴さん（浜）



かつては、農業や化学肥料も使っていたという光久隆晴さん。50歳で農業専従になったとき「農業散布に追われるよりも、のんびりとした自然にやさしい農業をしたい」と思ったり話します。以前は固かった土が有機肥料に変えるとフカフカの土に変わっていったそうです。「土が本来もつ力が蘇ったという畑は、公園の落ち葉をもらって土にかぶせたり、乾燥を防ぐからと雑草もあまり抜かないとか。土からの養分をたっぷり含んだ大根や白菜、ホウレンソウなどは、野菜本来の甘みがあると評判。」採れた野菜から種を取ると、買った種よりも生育がいい。そんなことも、みんな野菜が教えてくれる」と言う光久さんは、いま自然体の農業が楽しくてしかたがないと笑います。

豊中で唯一
大阪エコ農産物認証を
取得

以前受け入れた農業研修生が描いてくれた看板。8人いた研修生のうち6人がいまでも農業を続けているのがうれしい、と話します



豊中で農業を守る

「農業は大切な家業」

中尾俊宏さん・中尾俊治さん（東泉丘・東豊中）

いまでは団地やマンションが立ち並び東泉丘や東豊中で、何代にもわたって農業を営み、その農地を守り続けているのは中尾さんの四兄弟。マンションに囲まれた三男・俊宏さんの畑では、マンションのバルコニーから野菜の収穫作業が終わるのを見届けた住人がすぐさま直売所で購入する

「子どもの頃と周囲の環境は様変わりしたけれど、いまも家業の農業を家族全員で続けていけるのは有り難いこと。子どもたちにも働く親の背中を見せていきたい」と四男の俊治さん。トマトやナスなどの新鮮野菜は、畑のそばに設置する無人販売所で販売するほか、市内の八百屋にも卸しています。



子どもたちも自然と農作業を手伝う習慣が身について、家族みんなで畑を守っています



中尾さんちの「おいしいやさい」販売所

